

日本のたいせつなお友だちへ

もしも世界がおかしくなってしまうなければ、私はきっとみなさまと同じ場所にいた（「ここ」を共有していた）ことでしょう。一目で夢中になり、我を忘れるほど好きになった国に、本の紹介のために飛んで来ていたことでしょう。

残念ながら、本の紹介といった取るに足らぬ理由から、対蹠地（地球の反対側）に飛んで行く時代はもう終わりました。しかし、いつか将来、また日本を訪れることができるものと、大きな大きな期待を抱いています。

あの世界——移動する、熱に浮かされた、絶えず動いている世界です——を記述していたとき、私はずっともうこんな風だろうと思っていました。ところが、私の、例えば『移動派』のような本は、もはや歴史的な価値を有する、去ってしまった世界の記述であることが明らかになってしまいました。

みなさまの目の前に、私がここ、ポーランド南部の小村で書いたものがあるということ——私はそれを誇りに思います。そして同時に、私の本の訳者である小椋彩さんに、ものすごく感謝しています——彼女は私の言葉を翻訳してくださっただけではありません、そもそも私がじかには知らない、みなさまによって読まれることができるように、そして、理解され経験されるように、私の言葉のために文化的な文脈を発見してくださったのですから。自分の本が別の言語に翻訳されたのを見るのは、女性作家にとっても男性作家にとっても、大いなる日です。

私の人生には幾度か、こんなことが起こりました——新しいテキストを作っているときに、このテキストは私が思いついたのではない、いやむしろ「作り直している」んだという、奇妙で不安な感覚を持ったのです。私がそれを仕事場に持ち込む以前に、それは文学の倉庫のどこかに忘れられ、埃を被って存在していた、今私はそれを日の当たるところに引き出し、古い品物のように修理し、汚れを落とし、最後にはそれを他の人たちに見せることができるように作っている……という感覚です。

『迷子の魂』は、まさにそうでした。私は、この物語を何度も聞いたことがある、そして、この物語を書いている私は、よりよく人々の心の響くように、それに文学的な形を与えているにすぎないという、感覚を持ちました。

しまいには、私が行っているのは盗作かなにかではないかと心配になってきて、出版社の女性に問い質しました。というのも、居心地の悪そうな、迷った、自信がないように見える人のことを、(少なくともポーランド語では)「あ、あの人、きっと魂が迷子になったんだ」と言わないだろうか？ それとも、魂と身体の一部性あるいは協働という、ある種のモデルが前提されているのだろうか？ 魂と身体が離れることは、いつも、危機として、否定的な何かとして、究極的には死として扱われる。

そして、このちっちゃな物語のすべての意味の基になっている、肝心要の問いかけ。もし、私たち自身の生のスピードと私たちの魂のスピードが別物だったら、どうなるか？ もしかしたら、魂は、世界がまだすっかりおかしくなってしまうなかった、そして私たちが魂と一緒にそのなかを動くことができた、私たちの古き良き子ども時代に属しているのかも？

あまりにも当たり前で、それがないと辛くなる、だからそれを思いつかなくてはならない…そんな物語があります。『迷子の魂』はまさに、その一つです。

最初から、この物語には美しい絵が添えられなくてはならないとわかっていました。ヨアンナ・コンセホの絵は、御伽噺のようで、懐かしくて、ヴィンテージ・ワインの魅力を湛えていて、このような感動を与える絵は他にありませんでした。それは、私たちの子ども時代の世界を、私たちが憶えている通りに描いています。ヨアンナの感受性はいつもどことなく子どもっぽく、疑いを知らず、細部に敏感です。私はときどき、ヨアンナが絵にする瞬間は、ちょうど私たちの記憶のなかでそれがモノクロームになろうとしている、つまり消えようとしているそのときに、捕まえられたのではないかと感じます。一瞬後、それらのあとには、黄ばんだ四角い紙しか残らない。

ヨアンナとは、これからの計画もあります。(こっそり微笑む)

私は、日本に飛んで来て、のんびりと日本の田舎に出かける、そしてそこにクウォツコの谷にある私の村とそっくりの場所を探すことができるような日が、またやってくるだろうという期待を抱いています。

みなさまのご健康とお心の朗らかさを、お祈りいたします。そして、みなさまがいつも、みなさまご自身のスピードの遅い魂を、落ち着いて待ち続ける可能性を持たれますように。

オルガ

© Olga Tokarczuk 2020